

静岡県における棚田の景観と生物相の再生

*下田路子（富士常葉大学社会環境学部）・稲垣栄洋（静岡県農林技術研究所）

山地や丘陵などの傾斜地に階段状にひらかれている棚田は、粗密の差はあるが、全国に広く分布している。耕作条件が悪いことや労働力の減少などにより、棚田の耕作放棄が各地で進んでいる。一方では、棚田の美しい景観が評価され、また棚田の多面的な機能が認識されるようになり、小区画で不整形の伝統的な棚田の保全や復元が各地で行われるようになった。

発表者らが在住する静岡県には、小規模な棚田から広い面積を占める棚田まで、また石積みの棚田や土坡の棚田と、多様な棚田が存在している。県内には1999年に農林水産省が選定した「日本の棚田百選」に選定された棚田が5地区ある。また同年に、静岡県は「静岡県棚田等十選」の選定を行っている。今回は棚田の再生事例として、構造が異なる2か所の棚田、石部と倉沢の棚田の再生事業を紹介するとともに、埋土種子の発芽実験結果より棚田の植物相の再生についても言及したい。

(1) 石部と倉沢の棚田

伊豆半島南西部にある石部（賀茂郡松崎町）と牧ノ原台地の北西斜面にある倉沢（菊川市）の棚田は、いずれも「静岡県棚田等十選」に選定されている。石部の棚田は石積みで、石畳の農道も残っている。倉沢の棚田は土坡で、狭い不整形の田が鱗のように台地斜面に広がっている。1960年代の写真は両棚田とも全域で耕作が行われていたことを示しているが、その後は耕作放棄が進んでいた。「静岡県棚田等十選」に選定された1999年に、両棚田で地元住民とボランティアによる棚田の保全活動が始まった。一部ながら放棄田の復田が行われ、棚田の景観や水田生態系が再生されている。

(2) 棚田の埋土種子

復田された棚田には多様な植物が水田雑草として生育している。湿田や湛水田の多い倉沢では水生・湿生植物が豊富で、絶滅危惧種のイトトリゲモ、マルミスブタ、シャジクモ、イチョウウキゴケの生育を確認した。倉沢の復田した耕作田と耕作放棄田の土壌を用いた発芽実験では、耕作田から絶滅危惧種のみずオオバコが発芽した。30年以上前に放棄されてヨシが繁茂している放棄田の土壌からも、コナギ、ミズハコベ、マツバイ、シャジクモなど、耕作田であった時の水田雑草と考えられる多数の種が発芽した。発芽実験の結果は、耕作放棄後も水田雑草が土壌中に埋土種子集団として長期間存在すること、また復田後に耕作時の植物相が埋土種子より再生されたことを示している。

(3) 棚田の景観と生物相の再生と保全

石部と倉沢では、棚田の復田や管理作業にボランティアが協力しているが、日常の維持管理は地元の農家で実施している。棚田の管理を行う農家の高齢化と人手不足は、両棚田とも深刻な問題となっている。棚田の景観と生物相の再生は技術的に可能であるが、再生した棚田を維持できる体制が整わなければ、棚田の景観と生態系の持続的な保全は困難である。